

---

# doomsday

七瀬わん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

doomsday

### 【Nコード】

N5701S

### 【作者名】

七瀬わん

### 【あらすじ】

藤本幸綱は組織の飼い犬に疑問を持つようになっていく

## prologue

### プロローグ

目を開ければ血の海だった。雨で降った水たまりではなくて、河川が氾濫して出来たくらいに血の海だった。噴水の如く流れることの止まない血液は足元へ達しようとしていた。

動物が死ぬ時、出すべき穴から様々な体液を流すのだという。目や口、鼻の穴、肛門を脱脂綿で塞ぐのは体液流失を防ぐものだ。人間の場合、顎を紐で結び、固定するのもその理由の一つ。死後硬直によって固まった遺体を整えるのは至難の業。体重も本来のものより、倍に膨れ上がったしまう。

汚れきった奴から流れる血はやっぱり汚れてて、綺麗で純粹な心の持ち主だったら、純粹さは一気に瘴気と化して消え去ってしまうほどの威力を持っていそうだった。

藤本幸綱は右手に持っていた打刀を薙ぎ払って、血を飛ばすと鞘に納める。本来なら布で拭いて汚れた血を綺麗にしなくてはならない。血の鉄分で刀身が錆びてしまうので、ちゃんと拭き取れと刀鍛冶師に言われているのだが、幸綱は面倒という理由で拭かなかった。人一倍に日本刀を愛しているにも関わらず、今日はしなかつたのだ。地面にはドラゴリーネと呼ばれる動物最高進化を遂げた獣が頭と首が切り離されて、胴体は仰向けに頭は白目を向き虚ろな表情で天を仰いでいた。切断された首部からくすんだ黒赤の体液が流れ出て地面に注がれていく。意外にも白い頸部の骨が見えており、そこだけは綺麗なままでいてくれたんだなと感謝してしまった。刀の切れ味がそれだけ良いことを証明しているのだが。

世界に必要な生物などいないというけれど、害を与えるものは不必要だ。地に還ることなく、そのまま消えてしまえばいいのに。

「あーあ、つまんないな。刀だとすぐに切れて散ってしまう……」

それは満開に咲いた桜の花びらのように。秋ならば落ちていく赤い紅葉の葉のように、命はなんて儚いのだろうと思ひ知らされる。

一瞬の時を駆け抜けて、終わる時は呆気ないほどすぐに終わりを告げてしまう。汚れた血を持つドラゴリーネなら特に。

## 第一章

### 第一章

さわさわと橋の欄干に柳の木の葉が垂れ込み、風で揺れる。宵の風は身体に染み渡り、濁っている心まで晴らしてくれるほどの満月。空はこんなにも綺麗でいてくれるのに自分は汚れていて。悲しく打ちひしがれているところに満月と風が癒してくれる。

目の下辺りまで伸びた前髪を掻き上げて、幸綱は空を見上げた。つむじで結び、腰まである髪がさらりと揺れ動く。上のジャケットから下に着ているシャツ。履いているパンツは皮でできており、撥水加工もしてあった。足元は脹脛までの編み込みブーツ。パンツをブーツインしている。斬った際に飛び散った汚い血が弾いてくれるならば、幸綱は進んでこの服を着ていた。

こげ茶色の瞳で空を見上げれば、夜なのにと分かってしまうほどどんよりと暗雲が月の周りを囲っている。明日は天気が崩れるのだろう。徐々に幸綱を照らしていた月は陰り始め、完全に覆い尽くす。

顔を上にあげてみれば、頬にぼたりと雫が落ちてきた。  
雨だ。

徐々に雨粒は大きくなり始め、幸綱の袴を濡らしてしまった。だけど幸綱は気に留めることなく、空を雨粒を見る。

幸綱は雨が好きだった。雨は赤く血色に染まって汚れてしまった手を綺麗に流してくれるし、新しい命をも育んでくれる。恵みの雨とはとてもいい表現だと幸綱は思っていられない。

そんな雨が好きだった。

「幸綱、流行り病に掛かったら薬代がかかるだろう？ お前が風邪

を引くとなると大変なんだ。なるべく雨粒に当たらない」

目を閉じて、雨粒が顔に当たる感触を感じていると顔に当たらなくなつた。不思議に思い瞼を開けてみると知つた顔が傘を挿して覗き込んでいた。

「汚れを流していたんだ。私の手は汚れているから雨で綺麗にしなくちゃいけない。神様は私に何ひとつ恵んではくれなかつたから……。神が望むままに私は斬る」

ギツと強固に語る口は落胆を帯びていて、神への恨みと裏腹に幸綱の心情が語られた。

「忠義だねえ……」

くすりと笑い、男はまずと言わんばかりに幸綱の肩を掴むと強引に歩き出した。

幸綱はされるがままにしておく。斬つた後は罪悪感からなのか、動きたくなかつた。幸綱が動かないのを知っているからこの男は幸綱を見張る。斬つてから一時間、二時間動かないのはザラなのだ。

幸綱が斬つた男はこの界限で強盗の末、入つた民家の住民を強姦した後殺害した人物であり、逃がしてはならない重要な人間だつた。己の信条だけを信じて、幸綱は刀を握るのを辞めようとしなない。

腐つた世の中を変えるために、幸綱は孤軍奮闘している。

罪人を斬る代わりに幸綱が持つ罪を無しとするという判決が幸綱には下つていた。幸綱自身もまた罪人であり、罪人処刑をきちんと遂行するならば幸綱自らに着せられた罪は謀叛とするものだ。

幸綱に声をかけてきた男は、幸綱を監視するために大審院から派遣されてきた男。幸綱が行っている行為は完全に犯罪法理に違反しており、絞首刑は免れない。だが大審院は幸綱を飼うことにより、

犯罪者抑制を狙っているのだ。  
わざわざ凄腕だった罪人がいるのだから、利用する価値はあるのだと判断されたからだだった。

「飼い犬はせいぜい主に従っていればいい。お前は野垂れ死ぬことさえ許されないのだから……………」

男が挿した傘により、雨粒を避けていたが雨に濡れることを望んでいた幸綱は傘から出て歩き始める。傘から出た途端に快い風と共にポニーテールにしてある黒髪が舞い上がった。近くで雷も轟き始めた。幸綱に当たる雨粒がより一層粒の大きさが増してくる。

五ミリほどの雹まで落ちてきた。バラバラと空から零れ落ちてくる痛みでさえ、自分を綺麗にしてくれるものだと思う。顔を上げれば傷がついてしまっただろう。コンクリートに落ちていく雹は砂利に混ざり合い、水を含んだコンクリートによって解けていく。

男は幸綱の後を追いつ、再び傘を挿そうとした。

「私は飼い犬じゃない。私は自分自身の意思で正義を貫こうとしているだけだ。お前らの言いなりなんてならない……………」

幸綱は挿された傘を振り払う。振り払われた傘は高く舞い上がった後、地面に落ちた。雹の粒が大きさを増し、身体に当たる痛さも比例して増してくる。

前を見据える幸綱の瞳は家という箱庭で暮らす動物ではなくて、野生サバンナの大高原を生きる肉食獣の瞳をしていた。ギラギラと光るその瞳に映している先には何があるのか、男は気になったが、今はその疑問をしまい込んだ。

「あっそ。でも遂行率ナンバーワンの幸綱には動いてもらわないと

こちらとて、問題が発生してくるのだよ。指示書があるから今日は戻ってくれるよね？」

戻らないと言い張ったところで、この男は強引にでも連れて行くのだろ。幸綱は溜め息を吐き男に向き直った。

いつも張り付けた道化のような笑顔しか見せてこない男に幸綱は苛立ちを覚えた。口端を三日月に歪めた顔は、これこそ誰かに買われているのだと象徴するべきに相応しい。主人にしか笑わない。敵とみなした者には情けを買わない。優秀な番犬。

幸綱は怪訝そうに眉を顰めて男を睨んだ。雨に濡れて髪の毛が顔に張り付き邪魔をしてくるが、気に留めることなく幸綱は男を見遣る。男は地面に落ちた傘を拾い上げて、挿し直すと自分だけ雹から変わった雨粒を避けていた。強く雨粒が傘に当たる音が二人の静寂を打ち消している。

「ここで言え。ここは通行人などほとんど通らない場所だ。聞いている奴など皆無に等しい」

「本部じゃないと言えない。この任務は人に聞かれては非常にまずいものがあるのだよ」

道化の男は淡々と抑揚を付けることなく、真っ向から否定する。幸綱はそんな男の話し方も好きじゃなかった。何かの対策を用意してあるように適宜に言葉を選んで意見を言ってくる。嫌味な男だ。

「……用意してあるんだろう？ さっさと行こうじゃないか」

幸綱は面倒とぼやきつつ踵を翻して、来た道を戻り始める。男が寄ってきて、幸綱は再び男が挿す傘の中へ入った。

顔に張り付いた前髪を掻きあげて、幸綱は男に誘導されるがまま止めてあった車に乗り込む。愛用の日本刀を窓際に置き、懐刀は腰

に挿したままだ。隣に座る男からタオルを渡され、拭けと命令された。

命令を受け止めて実行するつもりは幸綱の中にはなかったが、これで拭かずに風邪を引いたら男に何を言われるか分かったもんじゃなかったなので、ここは素直に髪を拭いた。

長く伸びた黒髪は時にうっとおしくも感じるが、今は邪魔と思つて他選択肢はなかった。雨粒を浴びたことにより、首筋や顔に髪の毛が張り付き、気持ち悪い。今すぐにも腰に下げている刀で髪の毛を切つてやりたいところだったが、止めた。

『ユキは伸ばしてほしいな？　こんなに綺麗な黒髪を切つてしまうのはもつたないよ』

とある男の微笑んだ顔が浮かび、幸綱は頭を振つて飛ばさせた。

あの男と自分はもはや関係ないのだと言ひ聞かせるように。

## 第一章 2

「幸綱、よく来てくれたね」

男の上司と思われる初老の男性は肘を机に置き、屈託のない笑顔で迎える。

だが幸綱はその笑顔に隠された初老の裏の顔を知っているために顔を顰めた。愛嬌を振る舞うことはしない。

幸綱の笑顔が見られることを期待していた初老の上司は残念だとぼやきつつ、幸綱をソファアへ案内した。向かい側に座れと指示されたので、幸綱は指示に従い、ソファアへ腰掛けた。

「今日呼び出した用件を聞かせてもらおうか。くだらない理由で呼び出したなら私は帰るぞ」

タオルで拭いた黒髪はオールバックにし、ソファアにゆったりと座り足を組んだ。どちらが上司なのか分からなくなるが、立場を考えれば幸綱の方がはるかに下だ。

「幸綱、言葉を正せ」

「良い。幸綱は審判人でありながら処刑執行人だ。汚れ役を押し付けてしまっているのに忙しいところに来てくれて感謝するよ」

「感謝？ 元罪人の私に対して言う言葉ではないね」

はつと鼻で笑うと、同時に上から拳が降ってくるのが分かり、幸綱は受け止めた。パンと張り詰めた空気を弾くにはちょうど良い音が部屋に響く。

拳を降らしたのは幸綱の監視役を務める男だった。ぎつと眼光鋭く、睨み据えてくる。幸綱は顔色一つ態度一つ、変えず出さずにただ受け止めた拳を強く握り返した。

「言葉を改めると何度言えば分かる？」

「ゆいち君、構わないよ。苛立つのは分かるがこれが『彼女』だ。人間に服従することを選んだ唯一のドラゴリーネでもある」

「まさかとは思いましたが、バケモノですら飼っていたのですか？」

目を大きく見開き吃驚した顔を一瞬だけ出すも、次第に嫌悪感を顕著に出す。それが『ドラゴリーネ』という単語を聞いた後の一般人の反応だ。

幸綱はそのような反応を示す人間をよく見ているので今更いちいち表情を変えることもない。

ドラゴリーネ。

動物の最終進化系といっても過言ではない動物だ。

五百年前、東アジアを中心とした第三次世界大戦の際に使われた六価クロムを含む大量破壊兵器と核兵器の投下に大地は多大な被害を受け、自然界に生息するあらゆる動植物に影響を残すこととなった。

動植物は生き残るために、未来に子孫を残すために様々な進化を遂げようとした。互いを喰らい、強い種族が生き延びる。六価クロムに汚染され、植物の育たない大地も、五百年も経った今でも放射

能の汚染が続く大地に適応出来るよう。動植物は進化を続行した。果てに四百年前、百年という短期間の間に動物は最終進化を遂げることになる。

それが現在、ドラゴリーネと呼称される動物だ。ドラゴリーネは人型を形成し、人間と共に生存していく道を選んだ。

「共存を選ぶドラゴリーネは珍しい。その前にちゃんとした自我を持ったドラゴリーネが存在する方が稀有な状態なのだ。協力してくれるのは存分に使った方がいいのはゆいち君が一番良く分かっているはずなのだ。」

「……………」

ピクリと頬が動くのが幸綱自身にも分かった。触れてはいけない言葉、ナンバーワンに入る言葉を発した暁には生かしておけない。幸綱が懐刀に手をかけ、鞘から抜こうとしたのと同時に動いたのはゆいちと呼ばれた男だった。

ゆいちの動きは素早く、幸綱の背後から腕を首に回し、締め上げる。懐刀を奪い取り、幸綱の頸動脈に切っ先を充てた。

「ぐ……うあ……………」

気道が狭くなり、息苦しさが増す。ゆいちは本気で締め上げているらしく、呼吸確保するためには降参するほか余地はない。

幸綱は首に回っている腕を叩き、降参の意思表示を示して、ようやく解放してもらった。開放した後、一応身の危険にもあっていたにも関わらず、微動だにしなかった取締役部長の男が大きな溜息を吐き、ゆいちに言及した。

「ゆいち君、加減を覚えたらどうだね？」

「俺は姉と違い、加減を知りません。加減を知らない者が手を染め

るのであって……。ドラゴリーネに情けをかけるなど謂れも当に出来上がっているでしょう?」

きつぱりと答えるのは人として素直だ。だが、人の素直さは時として、空気を読まない時もある。

ゆいちはマニュアルを持って、その内容を長々と続けるつもりだったようだが、本部長に遮られてしまった。

「それでは、今は執行人である幸綱も加減を知らないということにもならないか?」

「幸綱は元々罪人でありドラゴリーネでもあり、一般良識から掛け離れております。加減を知らないのは当然でしょう」

ボロボロに言われている感はあるが、息を確保するだけで今は精一杯な幸綱は否定しようにも口出し出来なかった。口出ししたら、今度こそ息の根を止められてしまいそうだったから。

「そこで、加減の知らない幸綱とゆいち君に依頼をしようと思っただね。今の執行人の中では君らが一番適任だと思っただよ」

初老は笑顔を絶やすことなく、テーブルの下にあった書類を取り出してパサリと投げ出す。

書類を目にした途端、ゆいちの目が変わった。

写真にはゆいちとさほど年齢の変わらない、特徴的な藍色の瞳を持った男二人が写り込んでいた。

「ドラゴリーネが人型の形態を取るのを知っているね?　そこで、ゆいちと幸綱にはこの兄弟の征伐を頼みたい。黒田宏夢、惇兄弟だ。現在生存が確認されるドラゴリーネの中でも最高ランクを誇るだが、彼らは少々問題を起こしすぎる」

「……………」

答えないゆいち。黒田宏夢、惇兄弟と何か関わりがあったのか。幸綱は考えようとしたが、自分が深く関わりを持つこともないと自己納得し、考察を閉ざした。

ゆいちの顔色がどんどん青くなっていることから、信じられないとも言いたいのだろうか。

「どうするの話ではない。人間と共存を願ったドラゴリーネの親玉自体が破滅を望んでいるならば、その排除を徹底するのは当然のことだろうか。何を迷う理由があるのだ？」

幸綱は正論をぶつけた。

「そうだな、奴らはゆきるが命を懸けてまで作り上げた秩序を乱したんだ……………」

ようやく立ち直ったらしいゆいちが立ち上がり、言い放つ。まだ完全に吹っ切れてないのか、唇が震え、拳がきつく握り締められていた。

「期待しているよ」

腕を組んで、肘を肘掛けに置き、笑顔で男は見送った。

ゆいちと共に部屋を後にし、幸綱は自室へ向かおうとする。後ろからゆいちもついて来ていたが気にせず、部屋へ向かう。

唐突にゆいちが口を開いた。

「幸綱は聞かないのか？」

「何を聞けと言うのだ？ 私は言われた通りに行動し、任務を果た

す。それが私に与えられた任務だ」

果たせなかったのなら、自分の命が危うくなってくる。己のことなど二の次で罪状を重ねてきても、自分の命が関わってくるとなると妙に命が惜しくなってきたのだ。この世に執着を持つつもりは毛頭ないが。

「忠実な僕だよ、ホントに。幸綱に感情はないのか？」

歩みを進めていた足が止まる。ピタリと立ち止まった幸綱を不思議に思い、ゆいちが屈んで幸綱の顔を覗き込んだ。

「……………感情か。どうだろうな。ドラゴリーネに自我がないと言いつ放つたのは貴様だろうが。自分で言っていて忘れたのか？」

嘲笑する幸綱を見て、眉を顰めるゆいち。幸綱が頑なにガードしている下の一面を垣間見ることが出来たのかもしれない。

「ドラゴリーネは元々感情を表に出さない種族だと聞いている。だが、幸綱はあまりにも感情がなさすぎると思っただけだ。笑顔を見たことがない、怒った顔も、哀愁染みた顔も、楽しそうな顔も……………泣いているところも」

「泣き顔を見せるなど死んでも見せてたまるか」

元々、幸綱には感情というものが存在しなかった。どこかで落としてしまったのは確定なのだが、その場所が分からない。元々の形態である獣化が長いのも一つの要因であるが、特定できたとしても感情が戻ることはないだろう。

「幸綱でも苦しむってことはもちろんあるよな」

「なんだ、その私でも傷付かないという発言は。覆してもらおうか」

ジロリとゆいちを睨み据える幸綱。左腰に挿された刀の鐔に指を掛けているため、いつでも刀を抜き去り、すぐに斬りかかることも容易いだろう。

「あー、怖いから刀を下げてください」

「だったらお前も隠し持っている注射器を捨ててもらおうか」

先に根を上げたのはゆいちの方だったが、ロングコートにより隠しておいたつもりだった注射器を幸綱は見逃すはずもなく。

脇差しを抜き去り、幸綱はゆいちの首元へ切っ先を寄せた。ピタリと唐突に訪れた静寂が痛い。ゆいちは抵抗することなく、ポケットの中から注射器を取り出して地面に捨てる。

「筋弛緩剤か、はたまた睡眠導入剤……といったところか。私を黙らせるには十分だな。だが、気配を隠し切れていない馬鹿共をちゃんとしっかり調教しておくことだ」

落とされた注射器を見て、幸綱はぐしゃりと注射器を踏み潰した。どうせゆいちは有り余るほどに注射器を保持しているだろうし、護衛に回っている奴らは殺気を隠し切れずにビシバシときつい眼差しを送ってくる。

いつでも。いや、最初から幸綱への意識は敵扱いだ。簡単に人の首を落とせる身も心もない奴らばかりだ。

もしかしたら自分以上に人情の欠片もないのだろうなと思ってしまった。

「そうだね、変な真似をしたら俺が逆に殺される。何ていったって、次の任務は優秀だった俺の姉を無残にも切り裂いた人物だからね…

…」

この場にそぐわない笑顔を浮かべた後、苦虫を潰したような顔をし、眉を寄せるゆいち。それほどどきつい表情を浮かべるくらいなのだから、思い出したくない過去でもあるのだろうか。

「へえ、アンタでも無理なのに何で私？ やっぱ捨て駒なのか」

自嘲気味にぼやいてやる。

「お前、何で自分が生かされたのか分かってんのか？」

「十分承知している。それに私が生きている意味など、判決が下った時から決まっている。私が未成年の死刑囚には変わりない。終身刑で独房に繋がれたまま、いつ死刑執行書の紙が来るのかビクビクして過ごす。マゾヒストならまだしも、何で私がそこまで生きなきゃいけない？ なら、償える命なら死刑囚を受けた人間が処刑人として、全うした方が妥当じゃないか」

「それもそうだな」

究極の選択だ。独房の中でいつやってくるか分からない自分の死刑執行書を待ちながら日々を過ごす。二十四時間監視された状態で生きながらえつつ、未来のない絶望すらだけの毎日を神の下で懺悔する者は一年の間に何人減っていくのだろうか。精神に異常を来し、自らの手で死を選ぶのか。

迫りくる死刑台への恐怖と共に過ごすのであれば、何人殺しても罪状は問わなく、監視はされるものの、ある程度のプライバシーは尊重してくれる、この執行人という職業に就いた方がマシだと幸綱は判断したのであった。

だが、意見に背いた場合は即刻独房の中に逆戻り。死刑台直行は免れない。絞首刑ではなくて、新薬開発のための人体実験に使われ、

生きながら地獄と苦痛を味わうのは幸綱が職業を選んだ時点で決められていることだ。そのための誓約書も幸綱は記入済みである。

命を、消え去ろうとしていた命を存分に使えるのならば、従ってでも使えばいい。

「……奴らは既に社会秩序を乱しているのだ。何を躊躇う必要があるのだ？ いくら理性を持ったドラゴリーネだとしても、もともとは凶悪な精神を兼ね備えている。これ以上の殺人兵器をここに生かしていく必要性がどこにある。お前の姉が尽力した秩序が乱れているのが現状だ」

自分自身の判決が下った時のことを脳裏に浮かべて視線を下へ一瞬だけ向けた後、幸綱は正論を唱えた。

全てに絶望したあの雨の日。独房の小さな窓から垣間見た雨の日と。大切な人を失った時に降っていた雨は酷く酷似していた。

あまりの直球な質問に表情には出ていないが戸惑っているのは確実なゆいち。視線を下へ向けた後、哀愁染みた笑顔を浮かべた。

「ゆきるはドラゴリーネを纏め上げる人間だった。いつも危険と隣合わせの状態で、頼れたのは黒田宏夢。ゆきるは宏夢ただ一人だったんだ」

仕事上でも、プライベートでもパートナーだったというわけだ。

公私共にいた奴に殺されるとは誰も思わないが、実際にはよくあること。公私共にいたとしても、他人には間違いないのだから。

「だから何だ。仕事のことと意見が食い違い、殺された。これでは理由不十分か？」

「その通りだね」

「討ち入れとでも言いたいのか？」

「統一者であるゆきるが消え、俺は家族全てを失ってしまった。ドラゴリーネのバランスは崩れてしまっている。手には負えない状況だ。秩序を戻し、肅正するには今しかないんだ……！」

ギリリと獲物を補足した肉食獣の光る眼を幸綱は見詰めるしかなかった。光る眼はどこまでも一人の人物しか見ていない。

捕食者の目だ。獰猛の肉食獣。だがその瞳は恍惚と光り輝いていない赤。自身の片割れを奪われた者だけが発することが出来る、憎しみ。憎しみの色しか鮮やかな赤の瞳は色艶いていなかった。

「それが任務というなら仕方ない。全員殲滅させればいいのだろうか？ 情報だけは持ち帰って」

「幸綱に任せるよ。統制者がいない現状を鑑みても、全員殲滅が妥当な判断だ。いつクーデターを起こさせるか分からない組織だからな」

ぎちりと強く噛み締めたゆいちの唇からは血が滴っていた。

車がある場所に横付けされ、ドアが開けられる。どうやら現場に到着したようだった。降りるとポニーテールに括つてある黒髪がサラリと揺れ、風に煽られ宙に舞い上がる。ゆいちもゆっくりと降り立ち、自動でドアが閉まると車は静かに走り去って行った。

幸綱もゆいちも身に纏うは闇に紛れるように漆黒の上下。幸綱の服装は普段と変わらずに漆黒の小袖に黒のプリーツスカート。女であることを強調させられる服装だから幸綱はあまり好きではないが、動きやすいので我慢しておく。

さらりと流れるポニーテールの黒髪がゆらゆら揺れ動いている。見上げると威圧を漂わせ、立ちはだかるようにそびえ立つ門構えは長屋住宅を模した古い造り。扉の先の中も古きよき時代の日本庭園が広がりを見せていることだろう。

「こんな豪華絢爛という言葉が似合いそうな邸宅が本拠地にしているとはこの国も平和なもんだな」

皮肉混じりの意見が出てしまうくらいに邸宅は周りの邸宅とかけ離れていた。周りの邸宅もセキュリティーポストが置かれるくらいだから、国の重要幹部が住んでいることは誰でもわかる。プラスチック盾と腰には公式拳銃。警棒を持ち合わせているのはこの国の国防を担っている、治安維持部隊だ。一定の特殊訓練のを受けており、

たった一人の力で一般人の十人ほどの実力を兼ね備えていると聞く。邸宅には苗字プレートがかかっておらず、誰が住んでいるのかは住んでいる住人しか分からない。コンクリート柱の横にはガレージが置かれており、国産でも高級車に分類される車種、外車が並ぶ。治安維持隊は家の周りを警戒するため、万が一のことを備えて民間のセキュリティ会社も導入されている。

「この辺りが異常なだけだ。他はそんなに異常じゃない」

ゆいちの言う通りなのかもしれない。大通りより一本道に入れば、閑静な帝国一を誇る高級住宅街が建ち並ぶ。高級住宅と銘打っているだけあって、住宅というよりも邸宅と称した方が的確だ。横幅の面積も広く、広い邸宅は五百メートルを下らないだろう。

その邸宅街の中でも幸綱の目の前に聳え建つ邸宅は群を抜いていた。他との違いはセキュリティポストがあるかないかであり、門と屋根の間には監視カメラも設置されている。

「異常……ねえ。そんなこと堂々と言っているものなのか？」

チラチラと不躰に送られてくる視線に気づいていないわけではないはずなのだが、ゆいちははつきりと言い放ったのだ。

「ここら辺の住人は特に異常だから仕方ない。重要幹部とはいえ、実際に動かしている人物はここにいない」

「へえ」

興味がないとでも言いたそうに幸綱は鼻で笑った。ずっと視線を門へ集中させるとこちらもまた、不躰な空気が張り詰めており、幸綱は嘲笑った。

今日、幸綱が持ってきた装備は日本刀と脇差し。あとの装備といえば、ゆいちから渡された三十八口径のリボルバー。右腰から下げたホルスターにハンドガンを入れ、準備は完了だ。右に拳銃、左に日本刀。幸綱は両利きであるため、どちらでもいいのだが武士道に従って左腰に日本刀を据える。バックパックに補給用の弾倉を数百発入れてある。中にいる人の人数を把握していないため、弾がなくなったら、地道に日本刀で薙ぎ倒していくしかない。

本当はリボルバーではなくて、オートマチックの方が良かったのだ。リボルバーは装弾数が少なく、入れ替えに手間がかかる。一方のオートマチックは再装填するのに手間が省ける。銃では連射を得意とする幸綱にとっては手間のかかる銃を渡されたと思っていた。

一方のゆいちには既に戦闘体勢に入っていたようで、七十センチの打刀を左手に握り締めていた。刀の銘柄は『村正』と彫られていたから切れ味は抜群に良い代物だ。本物だったら、の話だが。

「さて、ただ今から審判を下しにいかうか」

「……………」

気障で寒々しいことを言うゆいちを見下してやる。こんなことを平気で言う奴だと思っていなかった。

勝手に自分でしろという気分になる。だが、これから待ち受ける楽しいことを脳裏に浮かべて幸綱は気持ち切り替えることにした。掛け声と共にゆいちが扉を蹴り、年月とともに脆くなっていたらしい扉は後ろへバタリと派手な音を立てて倒れる。

何事かと慌てふためいた中、獣化を取る男もあり、何体ものドラゴリーネが一斉に牙を剥く。ぎらぎらと獲物をロックオンした猛獣の瞳が幸綱を見遣る。

ぐるりと四方八方を塞ぎ、殺気立った目線をぶつけてくる。あからさまな殺気に幸綱は口角を上げる。

「お前ら、ドラゴリーネのくせして殺気消すことも出来ないのか？」  
かばりとドラゴリーネの口が開き、咽喉奥から閃光が現れる。す  
っと息を腹部に溜め、二酸化炭素を吐き出すように火を放つ。  
それが戦闘開始の砲火となる。

幸綱は呼吸を整え、精神集中すると鞘から愛刀を抜き去り、ドラ  
ゴリーネの群れの中に飛び込む。地面を蹴り、跳躍すると刀を斜め  
四十五度から振り下ろす。

電光石火の奇襲とはまさにこのことだろう。

首を動かすだけでドラゴリーネが向きを変え、幸綱に向かって火  
を放つ。雷を放つ。硫酸の唾を放つ。地面が抉れる、異臭を発して  
解ける。庭石が碎ける。庭木が焼けていく。

幸綱はドラゴリーネの顔の向き、視線から地面に当たる位置を特  
定し、避ける。ドラゴリーネが息を吐き出すまでの時間は結構な時  
間が掛かる。年齢を重ねれば重ねるほどに威力は倍増し、発射する  
時間も掛からなくなる。ドラゴリーネ換算の年代を五百年 人間  
の年代に換算して、三十歳を超えるドラゴリーネは連射を可能とす  
るが、時間を鑑みてもこの群れはせいぜい二百歳ほどの集団である  
ことを導き出した。

だとしたら、全身を覆う鱗もそんなに強固のものではないだろう。  
基準は五百歳。五百歳を超えたドラゴリーネは上位種のドラゴリー  
ネの鱗で形成された刀か、銃弾でなければ撃ち抜くことも敵わない。  
逆に五百歳未満なら、普通の銃弾でも鱗を砕くことはできる。鱗  
を砕いてしまえば、図体のでかいモノにしかなりえない。勝機は一  
気に幸綱に回ってくる。

銃で鱗を砕き、刀で切り落とす。若干、手間があるが幸綱は遊ん  
でいるのだ。相手の力量を測れない愚か者に闘い方を教えるように。

「お前ら、自分の力と相手の実力を読むことも出来ないのか？」

ハンと鼻で嘲笑してやる。ピクリとドラゴリーネの殺気が増し、空気が極度に張り詰める。

ドラゴリーネの首を狙って、再び跳躍し刀を振り上げて首を切り落とす。

ずずんと切り離された胴体と頭頂部が地面に沈む。

伸びた首を吹き飛ばしてしまえば、すぐに絶命してしまうのがドラゴリーネの最大のデメリットだ。

リボルバーのため連射をするとすぐに弾切れをおこしてしまった。排莖し、装填する時間はない。装填をしているならば、愛刀に切り換えた方が速い。

一瞬の判断の後、幸綱は右手のリボルバーをホルスターにしまい、柄の中間に持っていた愛刀を構え直す。張り詰める緊張感の臨場を存分に味わい、幸綱は刀を振った。

ドラゴリーネ達は幸綱の動きを捕まえることが出来ずに次から次へと濁った血黒色を撒き散らし、首を、胴体を、手足を切り離されて肉塊へと変わり果てた後、地面に転がっていく。

肉塊から溢れ出てくる血が海を形成し始めた頃、周りにいた生きるドラゴリーネ達は全て塊へと変わり、果てた姿を晒す。

ひゅつと何かが幸綱の方向へ投げられてくる。

全身真っ黒に染め上げたのに血で汚れた。唯一覆っていない顔が血で赤く染まる。

罪人の汚れた生きてはいけない血。

「あははっ！ 政府の番犬ってこんなにすごいんだ！ 罪状は一切問われずにドラゴリーネを容赦なく斬りつけて、肉片に変えることができる……。そこら辺にいる猟奇的犯罪者と同じだな」

奥の屋敷から一人の男が嘲笑いつつ、出て来る。白の袴と胴着を着ており、姿勢は正しく、その存在だけで威厳を放っていた。摩く黒髪と前髪の奥に見えるのは底冷えをするほどの深蒼。全てを見透

かし、上から全てを見る高見の見物者であり、全てを統べる王そのもの。

しかしながら幸綱から見れば、そんな男もただのターゲット。秩序を乱す犯罪人にしか思えない。

その男が手に持つのは『バケモノ』と称される銃身およそ二十七センチ、重量二キロのデザートイーグル。殺傷能力の高い銃だが、子どもが撃つと身体が吹っ飛ぶほどの威力を持ち合わせている。その中でも、構えているのは50AE版。威力としては文句はないが、あんなバケモノ銃の弾に当たったら、内臓を食いちぎられるのは間違いない。

再生医療が普及し始めている医療事情があつたとしても、幸綱の立場だと優先事項にはとてもじゃないが、治療を受けることは困難に等しい。

元々、治癒力は一般的なドラゴリーネよりも速い幸綱にとって、再生することはほんの一瞬の出来事に過ぎないが。

「宏夢……！」

眉間に深い皺を刻み、同じく銃を右手で持ち、左手を支えて構えるゆいち。ゆいちのような細腕にデザートイーグルを持つのはきついだろう。女である幸綱だつて然り。

サムセーフティを解除しスライドさせ、ゆいちは幸綱の後ろで宏夢の心臓を狙っていた。既にトリガーに指をかけている。

「ドラゴリーネの癖して、人間が持つ道具を扱うとは。貴様、それでもドラゴリーネか」

今にも撃たんとしているゆいちを横目で見た後、幸綱は淡々と罪状を言い、銃を構えている宏夢に近づく。銃に対して幸綱は刀一つだけで、力の関係では圧倒的に幸綱が不利である。

「何が言いたい？ ドラゴリーネだって、自分の利益となる道具く  
らいの判断くらい付く。自我がないと思われても困るな。ある程度  
の年齢に達すればドラゴリーネだって、自我は生まれる。その時間  
が長いからいつまでも自我を持ってないドラゴリーネが出てくるのは  
弊害でしかない」

ニヤニヤと下品な笑みで幸綱を高見下ろしてくる。幸綱は上から  
言われることが嫌いだ。今から浴びるであろう、目の前の男の  
黒々とした地を見るとなればなおさらだ。

(ああ、こんな男が国家を反逆したら逆に国が荒れる)

ジャリツジャリツと砂を踏む軋んだ音が庭に響き渡る。宏夢の佇  
む縁側へと近寄っていく。転がっていた三十八口径のオートマチッ  
クを拾い上げて右手に持ち、サムセイフティを解除して宏夢へ向け  
た。

「お前は家族を殺した。何故だ？」

「そんなこと、見ず知らずのお前に話す義理はない」

「ゆいちは弟だ。遺族だ。聞く権利を持ち合わせているだろう」

ハンツと鼻で笑うと腹を抱え、宏夢は笑い出す。

「遺族？ ほぼ絶縁状態だったくせに……？ ゆいち、お前こそ『  
キョウダイ』を名乗る資格はねえよ。それにお前にその『バケモノ』  
が使えるのか？」

「……………」

蔑まれているにも関わらず、ゆいちは銃を構えて黙ったままだ。

撃つ気はあるのだろうか、と幸綱は思ってしまった。

「俺はお前が殺したのを知ってここまで来た。お前を、ここをぶつ潰すために俺は生きてきた」

「だからなんだ？ 組織の飼い犬を連れてか？ お前は臆病だ！ 一人じゃ何も出来ない！ まるで虐められっ子の復讐だな！」

高らかに笑う声がこだまする。ゆいちはまだ動かない。

深海に堕ちた手負いの獣が目を覚ましたらどうなるのか、幸綱は疑問に感じたが、さっきの言葉に訂正を入れた。

「私は『飼い犬』になったつもりはいない。そうだな、例えるならば、獲物を見付けて狙っているハンター……。ハンターは狙った獲物は決して逃がさない」

ギリリと殺気を込めて睨めば、一瞬宏夢の気が緩む。そこを見逃すほど幸綱は劣っていない。むしろそのタイミングを狙っていたのだ。

砂利を踏みしめてから間合いを一気に詰め、幸綱は下から上へ宏夢の右手を切り落とす。ぼとりと醜い音と共に右手が縁側に落ちた。同時に右手に掛かっていたデザートイーグルも落下する。

幸綱は左手に持っていた刀を鞘へ戻し、右手に持っていたオートマチックを投げ捨てる。落ちた宏夢の右手に絡んだデザートイーグルを拾い上げ、開いた左手で持ち、デザートイーグルを宏夢の喉元に突きつけた。

「あーあ、一瞬の気の迷いも見逃さないところはさすがだなあ……」

ゆっくりと目を閉じて、処刑を待つ宏夢。出てきた時の威圧感は当に消え失せてしまっていた。

「幸綱！ まだコイツには聞きたいことが……！」

幸綱の手により、処刑が実行されるのは間違いない。その前にゆいちが聞いておかなくてはならないことがあった。

「…………… ゆきるは、ゆきるはお前のことを愛していた」

殺された遺族だからこそ知っている本人の言葉。だが、宏夢は鼻で笑ってから、顔を大きく歪めて嗤った。

「ああ、知っていたよ。愛しているからこそ、口出してきたゆきるが憎かった。お前らが嗅ぎ付けなくて上手くいけば、この国を俺が支配してやったのに……！」

宏夢が放った言葉はゆいちを更に地獄へと陥れる。アリジゴクが生きるために掘り進めた穴に嵌まり、砂を掻き入ってもアリジゴク本体に辿りつくことが叶わない。

渦巻く陰謀の種を生長し、芽となり葉となり、花を咲かせる前に消し去るの役目を負ったのが幸綱の本来の使命だ。

革命を起こさせないために、世界を奮迅する組織が立った。依頼があれば世界のどこへでも赴き、起こせないように陰で処刑。国家を鎮静するために世界連邦が建てた組織。

幸綱はゆいちに処刑するのには不十分だと判断し、

「ゆいち、録音は取れているだろうな」

本人証明となる肉声録音がちゃんと取れているかどうか訊いた。

「…………… ああ、取れたよ」

それがたまたま、ゆいちの旧知の仲だっただけの話。いくら旧知の仲であったとしても、人の心には邪心が過ぎる。邪心を心の中で留め切れずに吐き出してはいけないのだ。人を、命を奪うなど人には出来やしないのに。

「んじゃ、ばいばい」

幸綱は左手に持っていた、デザートイーグルを宏夢の眉間に寄せ、引き金を引いた。吹き飛ぶ血、脳髄、脳漿、転がる蒼の目玉が二つ。頭蓋骨は完全に穴を空け、大脳が陥没する。

ぱたりと背中から仰向けに倒れ、黒赤色を垂れ流す。宏夢を中心に円を描くように広がっていった。縁側を伝い、ぱたりぱたりと河を作り、地面に流れ出す。

持っていたデザートイーグルを血海に投げ落とすと、バシヤリと血が跳ねた。

「銃も呆気ない。すぐに人の命を奪ってしまえるのだから……」

幸綱は持ってきていたタオルで返り血で染まった顔を拭い、縁側を降りてゆいちの元に近寄るとぐいっと襟元を引き寄せられる。

幸綱はゆいちの顔を飄々とした顔で見ると、ゆいちの顔は怒りで染まり狂っていた。ギリリと襟元が絞められるが、呼吸困難に陥るほどではない。

「何で俺に殺させなかった……！」

「あのままだと、ゆいちが逆に撃ち殺されていた可能性が捨て切れないし、撃ってしまったら後悔するだろう。だから私が代わりに撃った」

淡々と冷静沈着な答えで頭が冷えたのか、ゆいちは幸綱の襟元を離すとその場に座り込んだ。

「死んでしまった人は帰ってこない。人は儂いものだ。いつ死んでしまつか分からない。願っていても叶わないことだってあるんだ」

幸綱は座り込んだゆいちを上から見て、そう言い放つとさっさとその場を後にしようとした。だがゆいちがぼつりと幸綱の名前を呼んで引き留めた。本来の幸綱なら眩きを無視し、その場を立ち去るのだが、気分で幸綱はしなかった。

「幸綱……」

「なんだ」

「代わりに処刑してくれて、感謝する」

人を殺したというのに感謝される義理など幸綱は持ち合わせていなかった。むしろ感謝される意味が分からない。

盛大な罰を受け、この身が消え失せてしまえばいい。罰を受けることが天命ならば、喜んで引き受けよう。それが、幸綱に課せられた罰なのだとしたら。

## 第二章

「黒田宏夢の処刑を完了しました。兄、黒田惇は既に逃亡しており引き続き捜索、発見した後すぐに処刑をしたいのですが許可をもらえますか」

「許可しよう」

幸綱は本部にやってきていた。普段は報告することなく、次の現場に行ったりするのだが、今回はゆいちに引き留められ、仕方なく報告をしていた。直接本部に来たので、血がべったりと小袖に張り付いており幸綱は着替えたかったのだが、ゆいちに捕まってしまった。鼻に血の臭いが付き、幸綱は眉を顰めた。

報告書に書いてあることだけをつらつらと言い淀むことなく告げていった。現場でうろたえにうろたえていたゆいちは貼り付けたような笑みを三日月に歪めている。目元は全く笑っておらず、何かしら企んでいるような、そんな顔をしていた。

本部長を務める初老の男はゆったりと椅子に座り、背もたれに寄りかかって腕を組んで目を閉じている。その前に机を挟んで幸綱とゆいちがいるような状況だ。

パサリと報告書が机に置かれ、クリップで留めてなかった報告書が机の上に散らばり、挟んであった写真が出てきた。

処刑した当時の様子を写したものが何枚か。ターゲットとなっていた黒田宏夢と思われる首と胴体。時間が置かれた後に撮影したのか、首と胴体を中心に黒く変色していた。

美しい装いを見せていた日本庭園も松の木は倒れ、血で池は赤く

染められ、円錐の立て砂は無惨にもその姿を留めておらず、ただの砂利に変貌している。

その映し出された生々しい報告書を見た後、こくりとすぐに是の了承をした男は閉じていた瞳を開き、幸綱を見遣った。眦を下げた男の顔は慈愛に満ちた表情を浮かべているが、実際は慈愛など微塵の欠片も持ち合わせていない男であることを幸綱はよく知っていた。

「では何か情報が入りましたら直接連絡ください」

幸綱は冷めた瞳で男を見てからくるりと踵を返し、部屋を後にしていった。男は幸綱を引き止めることなく、ドアを見遣っていた。

「……………さて、ゆいち。どうだったかな？」

パタリと穏やかに閉まった扉を見送った後、その場に立ち尽くしたままのゆいちに男は語りかけた。じろりとゆいちが睨むのだが、相変わらずにこにこと笑顔を絶やさないう偽善者の男の顔に少しだけゆいちは苛立ちを覚える。はあつと溜息を吐き、事の詳細を思い出しただけでも頭が痛くなる。それをこの男は幸綱に報告を聞かずとも分かっているはずなのに、敢えてゆいちの口から直接聞き出すとしていた。

「どうだったって、何がでしょうか？ 省らかさずにちゃんと説明してくれないと解らないことが余計に解らなくなります」

「機嫌、良くないねえ。幸綱にあっさり処刑されたか？」

「……………」

凶星を突かれ、黙り込んでしまったゆいち。握り込んでいた拳をより一層きつく握り込んだ。力を入れすぎて、絨毯に血が滴ってしまふ。ぎりぎり唇と奥歯を噛み締めて、八つ当たりだけは防ごう

とする。出来ることなら、暴れに暴れてしまいところだ。

「ゆいち、拳が汚れてしまうよ？　そもそもあの子には感情が失ってしまつてね。組織で飼つていないと再び罪人へ戻つてしまう。むしろ政府派は心強い味方が出来たと思つているようだがね」

「心強い味方だと！？　ふざけんな！　女のくせにデザートイーグルをぶつ放したのに！？　いつ欺かれてもおかしくないくらいに脅威だ！　何で、組織はあの女を飼うんですか！？」

バンつと机を両手で叩き付け、ゆいちはきつく眉根を寄せて、睨んだ。机に爪を立てる。二スを剥がすだけで、机本体には傷は付かない。ただゆいちの爪が割れるだけだ。それでも男は笑顔を崩すことはない。

「ゆいち、違うよ。脅威だからこそ飼うんだ。連邦にとって、大審院にとって危害を加えるならば、被害を抑えるにはどうしたらいい？　幸綱という脅威の死刑囚を飼いならすことでどれだけの人災が防げた？　あの子には正義がある。誰にも揺すぶられても変わらないう頑なで純粋な意思が。……それを最大限に利用しないでどうする？　我々の目的は国家、世界連邦政府の治安維持部隊でもある。大審院も彼女もまた了承していることだ」

それまで浮かべていた笑顔を瞬きで消し去ると、男は真顔で言い聞かせるように言った。

散々骨の髄まで染み込まれたことを改めて言い渡され、ゆいちは再びぎゅっと拳を握りしめた。忘れていた自分の使命を思い出したのだ。

脅威となるものは敵に回したら、厄介。だから幸綱を『組織』という檻に繋げておく。

「俺はアイツを頼らない。俺は俺なりに世界を守ってみせますよ。例え、非人道外道だと言われてもね……」

俯いていた頭を上げてゆいちは自分に言い聞かせるように高らかと男に宣言した後、部屋を後にしていった。淀んでいた瞳に光が戻ったのを見て男は頬杖を着いて、嗤った。

「痛みを知る者でしか、肅正はなされない……か」

机にはゆいちが滴らせた血が黒く変色し、机に同調しようとしていた。

## 第二章 2

部屋を後にした幸綱は白の小袖に紺の袴に着替えを済ませ、廊下を歩いていった。ただ淡白に続く廊下を歩いていると、銃声が微かに耳に届いた。何事かと思い、銃声のした音を辿って、足に力を込めて走り出す。

階段を幾分か降りた先には、射撃室と書かれた看板と共に重厚な鉄板の扉がそこに鎮座していた。気晴らしにでも撃つていくかと幸綱は軽い気持ちでドアノブを握り、扉を開けた。

「……………」

コンパートメントから精悍で白のシャツの下からでも分かるほどの肉体美を見せ付けて、男が近寄ってきた。間合いを取られたら、幸綱に勝ち目はないだろう。男の肉付きと幸綱だと子どもと大人だ。まず、性別で体格の違いは出てきてしまうから幸綱に初めから勝ち目は見出せない。

幸綱は腰を落として、反射的に下げている愛刀に手を掛けようとする。

「銃と刀ってどっちが速いんだろうな。刀身を鞘から抜くのには時間がかかるし、銃弾を切るとなれば並大抵の反射神経と動態視力でなくてはならない。刀を取るよりも自分の身を避けた方が無難だと俺は考えるな」

幸綱の抜くスピードがいくら速くても、男との距離は近い。鞘から抜く前に撃たれてしまうのは必然的だ。

「そうだろうな。刀のデメリットを突かれました。でもそれなりの距離があれば私は出来る」

幸綱は手にかけていた両手を顔の横に上げて、降参のポーズを取り顔を俯かせるが、それは一瞬の出来事にすぎなかった。

次に顔を上げる頃には嘲笑して男の顔を舐め上げるように見上げる。光る黒耀石の瞳は挑発の眼差しを籠めて。

「へえ？ この前の処刑でデザートイーグルをぶっ放した奴ってお前のことか！ 女のくせに諸ともしない撃ちっぷりだったそうで。銃担当の俺としてはお前の実力を見てみたかったところなんだ」

「ここでは性別は関係ないはずだろう？ デザートイーグルは持つには不便と言われているが、持ち方によって違ってくる。誰にでも扱えるモンだよ」

「へえ、じゃあ撃つてみてくれないか？ 実力を見てみたいんだ」  
「実力など大したことない。銃はあまり好きではないからな」

じろりと睨み据えた後、幸綱は壁にかかっていたデザートイーグルを見付け、手をかける。ずっしりとした重量感が手を伝い、肩にまできた。馴れ親しんだ感覚が徐々に回顧に出てくる。

弾倉を下から銃身に差し込み、コンパートメントに入った。幸綱

の目の前には木で作られた人型的が置いてある。距離はおそらく十メートルから十五メートルほどだろうか。

幸綱は目を閉じて呼吸を整える。ゆっくりと目を開いて、まっすぐ透き通った漆黒の瞳で的を見てから構えた。腕は脇腹に締め、銃を握っている左手に右手を添える。カチリと安全装置を解除した後は速かった。

室内に響き渡る銃声。次々と外すことなく貫通していく的。一発でも喰らえば致命傷は免れない位置に幸綱は一発ずつ精確に撃ち込んでいた。

男は幸綱に強い畏怖を感じずにはいられなかった。こんな華奢で肉付きの良くない細い幸腕がバケモノと称される銃の衝撃に堪えられるのか、初め疑問に思っていたのだが、見事疑問は解消された。

幸綱の常人離れした肩だ。幸綱は肩が強い。堅固な肩が幸綱の射撃を支えているのだと男は分析した。刀の柄を二指ほどの余裕を持ち、構えていた。肩も強ければ強固な方がいいが、それを握るための手の大きさも兼ね備えていなくてはならないのだ。

だが、幸綱が提出した報告書を読んでいた男は疑問を抱いた。幸綱の言う通り、デザートイーグルは持ち方次第で誰でも撃てる代物。しかし報告書で幸綱は、両手でなくて片手で撃つたと記されていた。そんなバケモノ拳銃を意図も簡単に片手で持ち、連射するなど以つての外。男のゆいちならまだしも、幸綱は名前がこんなのであるが女だ。差別する訳ではないが、世界最強と謳われる拳銃を常備するとなると後のケアが必要になってくる。

片手でデザートイーグル、片手で刀を振り回す処刑人、藤本幸綱。この女を野放しにしておくのは非常に危険極まりない。だから大審院はこの女を飼いならし、処刑人として連邦政府の駒として邪魔者排除を行っているのだ。

銃声が鳴り止んだのは、カチリと弾切れを意味する音だった。ふうと溜息を吐き、幸綱は空になった弾倉を抜いて、銃を台に置いた。

「銃は呆気ないほど一瞬のうちに人の命を消してしまう。外せば別かもしれないが。一番、手っとり早い方法だ」

「藤本、幸綱だったけかな？ 俺は射撃室の担当をしている高平昇だ。撃ちたい気分だったらいつでも俺に言ってきてくれ。銃の整備くらいしてやる」

「高い所に昇るのが好きなのか」

高平の誘いを聞き流して、幸綱は鼻で笑ってからかってやった。

「なっ！？ ふざけるな！ 誰があんな高い所に昇るしかないんだよ！」

「アンタも狩り出されることあるんだろ？ 高所恐怖症って大変だな」

「どうやら高平は高い所が駄目のようだ。幸綱は高平を多いに馬鹿にして、射撃室を後に行った。」

その際、置いてあったデザートイーグル二丁と数十発に及ぶ弾倉を持ち出したことに高平が気付くのは、少し経った後の話。

### 第三章

幸綱は柳の木が垂れ込む、川の畔にやってきていた。カチャリと歩を進めていくうちに鳴る愛刀。一緒に歩いているのだと認識せずにはいられなくなる。

射撃室にて拝借してきた、デザートイーグルは既に幸綱の両腰から下げたホルスターの中に収まっていた。

本来、幸綱は日本刀も二刀流、銃も二刀流のスタイルだ。両利きであるため、どちらで撃つたり、斬つたとしても性能比に大差は見られない。あえて言えば若干、右からの攻撃に弱いということのみ。川の畔の草むらに座り、水脈の流れる様子を眺めていく。川に入ろうと思わないが、小さい頃に川で遊んだ記憶が脳裏に過ぎった。パシヤリと水の跳ねる音が聞こえた。

幸綱はすぐに反応を示し、音のした方向へ視線を向ける。

ドオオオン！！

轟きと共に現れるのは閃光。眩しい光りに幸綱は袖で目を覆ったが、直後に薫った異臭に眉を顰めた。

「血の臭い！」

轟音のした橋に向かうと、橋の欄干に寄り掛かるようにして、絶

命を待っている男。膝から足がない女。左腕が肘からない少女。その先、橋の中央を中心として怪我人が出ており、被害者は多数出ているようだった。

橋の中央は黒く焼け爛れており、血痕が欄干に刻むように付いていた。肉片も所々、確認できた。

一瞬の出来事による惨状に人々はパニックを起こし、逃げ惑う。それがさらなる被害を出してしまうのだ。

幸綱の瞳が一気に見開かれ、一種を答えを導き出した。

「自爆テロか………！」

恐らくは自身の腹にダイナマイトを巻き、人通りの多いこの橋を狙った局部による犯行。計画性は高いと判断するのが打倒だろう。

ダイナマイトの火薬量を調べてみないとどのくらいの人間による犯行なのか分からない。だがこの自爆テロ事件は確実に実行犯と主犯犯の二グループがいるのは確実だ。

再び耳をつんざくような轟音の後、上がる悲鳴。また近くで自爆テロが発生したようだった。

幸綱は舌打ちをした後、本部と連絡を取った。

「もしもし」

幸綱、今そこで起きている状況を説明してくれないか？

電話に出た男の声は、この自爆テロがあることを先に認識していたのか、被害状況を説明しろと言いはじめた。

「十五時四十八分、五区桜丘にて自爆テロ事件発生。死傷者多数。近くに指揮した者がいると考えられます。近辺に厳重体制を敷いてください」

幸綱の出した厳戒体制により緊張感が高まる。ぴりぴりとした張り詰めた空気が幸綱の身体を縛っていく。

治安維持部関係者　中でも爆発処理部隊が防弾・防刃チョッキ、透明な盾と三十八口径治安維持部仕様の拳銃ではなくてライフル銃を持ち、重厚な警戒態勢を取る。仕様はテロ対策といったところか。まだ自爆テロの首謀者と見られるグループから声明が出ていないにも関わらず、この厳戒体制。過剰ではないかと思ってしまうくらいだ。こんなに厳戒に扱っていたとしても市民に対して、何も報道されずに黙殺されることだろう。

犠牲者がいくら出たとしても、『何もなかった。単なる事故だった』として処理され、事件に携わった、その場にいた目撃者は催眠療法により記憶を忘却させられてしまう。横暴だという声も上がらなくないが、政府のやり方は正しいとの支持者の方が大きく、今回のような反対派が自爆テロを起こし、主張するのだ。

「おい、お前！　ここは関係者以外立入禁止区域になった」

治安維持部の制服を着た男が幸綱に近寄り、幸綱を摘み出そうと幸綱の腕を掴んだ。幸綱はすぐにその手を振り払うと、上着のポケットから黒曜石の丸い珠が連なったブレスレットを取り出して男の目の前に見せつけるようにちらつかせた。

「……………っ!？」

「私はこういう者だ。まさか治安維持部関係者でこのブレスレットを持っている意味が分からない人間がいるのか」

男は苦虫を噛み潰したような苦い顔をする。その男の瞳には畏怖が灯されていた。幸綱はそんな反応を示す奴らを嫌というほど見ているので、男から視線を反らすと言い放った。

「ということ、お前は私を追い出す理由がなくなつたわけだ」

このブレスレットは死刑囚であつた者が、政府の犬 審判人、  
処刑執行人として飼われている証であり、戸籍を持たない幸綱の証  
明書代わりでもある。

戸籍を持っていないのは、死刑判決を受けた際に人権を剥奪され  
るためだ。剥奪された人権は身分証明するための戸籍も含まれるの  
で、幸綱に戸籍はない。

その代わりにブレスレットがどこに所属しているのかを証明する  
のだ。

幸綱はブレスレットを右手首に嵌めた。また別の奴に聞かれてい  
ちいちポケットの中から取り出すのが面倒だつたからだ。個人的に  
あまりブレスレットを着けていたくはない。ブレスレットは自分の  
素情を明かしてしまうし、街で堂々と歩けなくなってしまう。

「で、犯行声明は届いていなかったのか？」

幸綱はブレスレットを睨んだ後、最低限の言葉数で男に問い掛け  
た。苦い表情を続けたままの男は幸綱と視線を合わせようとせず、  
答えようとした。

「まだ届いていませ……………」

男の声を遮るほどの轟音と共に再び、黒い煙と炎が上空へ舞い上  
がった。爆風により幸綱のポニーテールが舞う。ぐるりと四方八方  
視線を廻らせて、どこで発生したか視認する。

近くでまたしてもテロが発生してしまったのだ。犠牲者が出て、  
血を見て喜ぶ狂喜異端者がこの近くにいる。

幸綱は舌打ちをすると、男に言い放つた。

「全ての通行人を一人ずつ調べる！ ダイナマイトを含む火薬を持っている奴、三十センチ以上の刃物を持っている奴、麻薬を持っている奴を拘束しろ！」

単なる自爆テロ事件ではない。もしかしたらこのまま、五百メートル範囲内にある国家主要機関を征服される恐れまで出てきてしまった。

幸綱は携帯を取り出して、再度本部へ連絡を取った。

「その後の経過を……………」

『報告は帰ってきてからにしようか。幸綱、最悪の事態が起ころうとしている。現場はゆいちに任せて、幸綱は主要決定事務所に向かえ！一刻も速くクーデターを阻止するんだ。手段は問わないが処刑するのは待ち、首謀者を確保しろ』

用件だけ言うと電話は途切れた。電話の向こうでもざわめいていたから、対応に追われているのだろう。幸綱自身は前線にいる立場なので、後の処理に関わることはない。大事になる前に首謀者を捕まえるだけだ。

最悪の場合がクーデター。

幸綱は一人の男を頭の中に過ぎらせた。最近、捕まえることが出来なかった男。握っていたのは裏。元締めをしていた奴だ。ゆいちの知り合いでもある。

そのような人物ならば、火薬も麻薬も刃物もいくらかでも手に入れることが出来る。構成人数も多いから突撃を仕掛けたとしても、障害は発生しない。

「ちっ、逃がしておいたのがまずかったのか」

今更後悔したって遅い。幸綱は気持ちを切り換えると官邸に向かって走り始めた。

轟音と共に悲鳴があちらこちらで響き渡り、救急車の音が鳴り止むことはない。止めるには自分が首謀者を捕まえる他、余地はないのだ。

捕まえることが出来なかったら、だなんて最悪不幸なことは考えない。幸綱の図式は逮捕・処刑執行出来ないイコール自らの死と直結してしまう。失敗は許されないのだ。

人込みを掻き分け、武装した治安維持官、軍人に呼び止められ、途中テロに巻き込まれそうになりながらも幸綱はようやく主要決定事務所前まで辿り着くことに成功した。高さのある門を助走無しで飛び越え、敷地内へ侵入を果たす。

ぐるりと敷地内を見渡し、誰もいないか確認すると、首謀者はまだ官邸に来ていないようだ。殺気立っている気配がするのは明らかなのに、強烈な殺気を出している人物が見当たらない。死角に隠れているのだろうか。

「……………」

視線を殺気がする方向へ探しつつ、幸綱は気を引き締め、いつでも戦闘可能な状態へする。愛刀はいつでも抜けるように腰から下がっている。太腿に着けているホルダーから拝借してきたデザートナイフを取り出し、カチリと安全装置を外した。両手で持ち、脇を締めて固定する。

「おーすげえな……………。こんな番犬が出て来るとは思っていなかったよ。もしかしてお前が俺の弟殺っちゃった？」

幸綱の背後、上から声が飛んできた。どこかで聞いたような沼底へ落としそうな低く、苛立ちを覚える声。

ピクリと眉間に皺が寄るのが幸綱自身でも分かり、声がした後ろへ身体ごと旋回させ、左足を軸に右足を振り上げる。ミシリと相手の腕が鈍い音を立てた。男はニヤリと不敵な笑みを浮かべ、ダメーヂを喰らっていないかったのか、平然と幸綱を見下ろしていた。

男の容姿は先日、処刑した黒田宏夢に似ていた。漆黒の闇色の髪の毛に藍色の瞳は片方だけ。右目は髪の毛と同じ闇色をしていた。所謂、オッドアイ。

「……………処刑対象者を執行して、何が不服だ？」

ジャキッと銃を構える。二メートルにも満たない至近距離だから銃を撃つよりも打撃攻撃の方が速いだろう。だが、相手は銃の他にも何を隠し持っているか判らない。相手の動向を伺うしかない。

「あーあ、宏夢はこんな奴に倒されたのか。ホント間抜けだよな。どうせ素直に呆気ないほど簡単に処刑されたんだろ？ ……その銃で」

すいっと構えている銃を指差された。幸綱が持っているのはデザートイーグル。幸綱は刀を愛用しているが銃でも処刑を行っている。ただ精度が上という判断で、たまたま今日は持ち合わせているだけだ。

確かに先日の処刑は抵抗の一つもせず、スムーズに処刑は執行された。本来、ゆいちが行うはずだったが、引き金は引けないと判断したため幸綱が代わりに執行したのだ。

だがこの男はその場にいたかのように語る。

「お前、黒田宏夢の兄、黒田惇か？」

確認のために名前確認をする。間違えて他人を処刑しないためだ。網膜、静脈を調べる機械があるのだが、今幸綱は持ち合わせていなかった。

「そうだねえ。ゆいちは元気？ 強がって男装してるでしょ」

「どうやらこの男。またしてもゆいちの知り合いらしい。」

だが、幸綱は聞き捨てならない単語を聞き、疑問を捨て切れなかったため思わず尋ねてしまった。眉間に寄った皺を更に深めてしまったのは無理もない。

「ゆいちが男装とはどういうことだ？ ゆいちは男じゃなかったのか」

「あはははははっ！ ゆいちは女だよ！ 番犬だって女のくせして幸綱と名乗っているじゃないか！ ああ、幸綱は元々……」

腹を抱えて笑われる。しかしこの男は銃を構えられ、今すぐにも撃たれようとしているのにも関わらず飄々とした態度を取り続けていた。撃たれてもいいのだろうか。

パンと軽い音が響いた後、血臭が立ち込める。銃口からは白い硝煙が上がっていた。二の腕を押さえているのは幸綱ではなく、男の方だった。ポタリポタリと二の腕から手首、指先へと血は繋ぎ、コンクリートに濁った沼を形成していく。

幸綱は先程まで寄せていた眉間の皺を緩め、顔には無表情を貼り付ける。

触れてはいけないことをこの男が口にした。

「あれー？ 凶星だった？」

「口を塞がりたいのか」

男に近寄り、眉間にゴツリと銃口を付ける。撃った銃口は熱を帯びていたのか、男の顔が歪んだ。今銃口を離したら銃口通りに火傷の跡が残っているだろう。

「津浪は生きてるよ。友紀ちゃん」

ヒクリと右頬が揺れ動く。

「今、津浪の話をしている暇はないんだ。もしかしくなくても、お前が自爆テロ事件の首謀者が」

「んー俺は指示してないよ？ ただ俺の下っぱが勝手に暴走しちゃって、俺は優しいから止めに来ただけ」

ケラケラと当たり障りのない笑みを浮かべて、幸綱を見下ろす。兄弟揃って人を見下ろすのが好きなんだと幸綱は思った。

「自分自身も追われているのに、わざわざ国家機密機関が集中しているこの場に来るものか」

当たり障りのない笑みが消え、ニイッと口元を三日月に歪めた。危険なことを企んでいる時によく浮かべていた笑みだということを知っていた。幸綱自身も浮かべたことがある。幸綱は大きく目を見開き、来るべき攻撃に備えた。

「……………っ!？」

ビリビリと腹をガードした左腕が痛みを帯びる。黒田惇が繰り出してきたのは上段蹴りだった。当たれば肋骨骨折、肺、胃へのダメージは絶大だ。幸綱は黒田惇の右足首を掴むと引き、バランスを崩



じと目で睨まれる。ふっと浮かべていた笑顔を消し去り、握っていた拳で黒田惇の頬を殴った。

「まだすぐに処刑されないだけありがたいと思え。死刑囚の逃亡は再審請求上申書を無視して、執行出来るんだから」

やはり回復力は一般人よりもかけ離れているようだ。鳩尾を擦りながらも黒田惇はゆっくりと焦らすように上着の内ポケットから携帯を取り出し、どこかに電話を掛け始めた。一息で呼吸を整え、相手が電話に出るなり言い放った。

「ああ、俺だ。交渉は決裂した。順次決行に移れ」

嫌な予感が幸綱の頭を過ぎった。黒田惇はニヤリと右口元を歪め、見下した瞳を幸綱にぶつけてくる。自身の頭には銃口が向けられているにも関わらず、気にしないそぶりは慣れているだけか。はたまた余裕があるせいなのか。

「貴様、何を言い出すんだ」

幸綱は強引に黒田惇から携帯を奪い取り、通話口を耳元に当てる。すると邪険な笑いと共に嫌な予感が当たろうとしていた。

「執行人の藤本幸綱サン。はじめまして？ いや、二回目だから先日ぶりって言った方がよかったですか？」

持っていた携帯電話を落とす。通話口から嫌味つたらしい笑い声が聞こえ、一瞬のうちに不気味な空間を作り上げた。通話口以外にも似たような嘲笑地味た声が聞こえてきて、幸綱はばつと聞こえ

た方向へ視線を向ける。

すると前にいたはずの黒田惇がいなくなっていた。ぐるりと視線に気を配らせるが、黒田惇の気配を察することが出来ない。携帯電話を後ろに向けた時、背後にただならぬ殺気を感じ、踵を返そうとしたが間に合わなかった。

形勢は幸綱の不利な方向で逆転された。幸綱は黒田惇により羽交い締めになれ、持っていた銃を奪い取られてしまった。腰に下げている愛刀も抜き去られ、一気に丸腰状態だ。

応戦しようにも腕を固定されているし、足技を繰り出そうとしても空を切つて届かないだろう。その前に攻撃を食らい、自身を傷つけるだけだ。また隠している戦力も奪われてしまう。

幸綱は舌打ちをし、眉間に深い皺を寄せて前から来た青年の男を睨み付けた。男は黒田惇と同じ藍色の瞳と漆黒の髪、身長は百八十センチ近くの高身長。

幸綱は男により顎を持ち上げられた。存分に顰めた顔で幸綱は睨み続ける。

「……………」

「いいねえ、この瞳！ 影武者を殺した時は格別に綺麗だったけど、この瞳が、身体が血で染まっていくのはまた別に格段と綺麗になるんだろうね。ゾクゾクするよ」

狂っている。幸綱はそう思った。既に改善不可能なほどに人格が異常にきたしている。人格が異常ではなくて嗜好が人として破滅しているのだ。幸綱も他人のことは言えないが、この男以上に破滅ではない。

この男は先日、ゆいちの代わりに幸綱が処刑したはずの黒田宏夢だ。幸綱が処刑したのは影武者だったようだ。現に目の前には黒田宏夢がいる。一連の首謀者と疑われるテロリスト　まではいかないだろうが、殺人犯がいるのだ。

この世にまざまざと生き延び、蔓延っている者の一人には変わりない。

「お前、あと何人いるんだ？」

すつと冷たい眼差しで宏夢を睨んだ後、緊張感と集中力を欠いていたのか右肩に痛みが走った。

宏夢によって奪われた銃口が幸綱に向けられ、一発が発射されたのだ。熱を帯び、ビリビリと鈍い痛みを発する肩。じんわりと脂汗まで滲み出てくる。ぐつと奥歯を噛み締めて痛みを堪え、ちらりと血が滲み出ている肩口を一瞥した後、宏夢に向き直った。

銃口からは硝煙が邪を描いて空に舞っていた。羽交い締めにしている黒田惇が避けていないのを確認すれば、弾は身体に埋まっているのはすぐに解った。

後で取るのは痛いんだよなと幸綱はぼんやり思った。身体を貫通し、弾が抜けていれば穴を塞ぐだけで処置は済むだろうが、弾が残っているならば弾を取り除かなければならない。その工程がかなりの痛みを帯びることになるのを幸綱は熟知していた。

しかも大抵の人間は右利きであるから、右肩を撃たれたとなれば相当なダメージを負うことは確実だ。黒田宏夢は残ることまで計算して、弾の残りやすい肩を狙ったのだろう。

「何人？ お前が殺した奴が一番優秀な奴だった。完全な俺のコピィ。ゆいちでも気付かなかったんじゃないかなあ……………」

この男は自分の代用として影武者を立てていた揚句、ゆいちの目晦ましをもしていたようだ。くつくつと当時のことを思い出して嘲笑う男に、幸綱は至極腹が立った。だが、今の幸綱は拘束されている身で逃げ出そうにも体格差、力不足で腕を抜けられそうにない。歯痒い思いで、じつと一瞬の間を見せるのを待つしかないのだ。

「ふうん、それは大層面倒なことまでして逃げたかったんだ。弱いね」

ふんつと鼻で笑えば、挑発に簡単に乗ってきた。気の短い男だ。握りしめた右手を振り上げ、幸綱の頬に下ろす。ぐつと奥歯を噛み締めたおかげで、唾内に影響はないものの、頬の痛みが走らない訳がなかった。ひりひりとした痛みの次にじんじんとした痛みを発疹させる。

「てめえ、殺されてえのか?!」

ゴリつと銃口を眉間に当てられる。これで発射されたならば、脳漿と多量の血液を周りにぶちまけて頭蓋骨陥没し、即死する。死因は脳挫傷だろうか。痛みを頭で感じることなく死ねるなら楽だろう。幸い、知り合いは傍にいないし、身内も当にこの世に存在していない。

そんなことを走馬灯に巡らせるが実行するなど幸綱には毛頭ない。抗える生き方を選択したのだからその生き方を全うするつもりでいる。だからこの場で易々と命を絶つなど以っての外だ。

「殺したかったら、殺せばいいよ。そのかわり、あんたが私の仕事をやるならね」

銃口を向けられているにも関わらず、幸綱は三日月に口元を歪めて笑った。

「誰が番犬みたいなことをするかよ！ 犬はもう懲り懲りだっ！」  
「犬はいいよ。何も考えずにただ主人の命令を忠実に従っていれば、餌にありつけるんだから。これほどまでに楽な生き方はないと思う」

よ

その主人の命令に逆らってしまったえば、忠犬ではなくなってしまう。ただの野良犬と同じだ。野良犬だったら自由気ままに生きられるかもしれないが、人害だと判断されれば保健所に通報され、捕まえられた末に殺処分は免れない。主人に尻尾を振るだけで明日の命が保障されるのなら尻尾を振った方が気楽だ。ただ自分の意見を聞いてもらえないだけで。

「てめえだつて、害を与えるだけの野良犬だつたくせして。今は組織の優秀なドーベルマンかよ。笑えるな」

「……………」

ハンつと鼻で一蹴してくる。幸綱は黙つたままだ。

「仲間を裏切つて、キョウダイを裏切つて殺したくせに。今度はイ子チャンぶつて処刑執行人！ こんな笑いのネタ、他にあるかよ！？」

眉間に皺を寄せる幸綱。内心、我が身が自由であればどうしてやろうか考えていた。盛大なほどに暴れ狂っていたところだ。だけど。

「あーあ、こんなにぶつ殺したいところなのに捕獲しろつて命令されてんだよな。『野良』だったらすぐに殺せたのに……。つまんねー」

眉間に皺を寄せていたが緩め、はあつと深い嘆息を吐く幸綱。溜息と眉間の皺は幸せを逃がしていくらしいが、本当のことだなと幸綱は思った。だが、皺を寄せずにはいられない。

野良ならば、すぐに拘束を抜け出して一つの抵抗も出来ないまま、

処刑していたところ。しかし、今の幸綱には『主人の命令』という首輪と鎖が繋がれている。幸綱の勝手な行動は許されやしないのだ。

「野良に戻りたいなら、俺らんとこに来いよ」

そんな中での宏夢が放った一言にひくりと頬が引き攣った。幸綱は吃驚した様子を一切出さずに躊躇いを見せる。

### 第三章 2

「でもなー全てが始まった元凶に辿り着くにはある程度確信された情報が必要だ。野良だと入らない情報だってあるだろう？」

「その情報欲しさに組織に入ったってか！？　ますます笑えるね！　かつて大白鳥と呼ばれた奴が言う台詞か！？」

腹を抱えて笑い出す宏夢。

大白鳥の情報網は組織以上の分布で、大白鳥の手にかかれれば執行されない者はいない、逃げ延びることは不可能と恐れられてきたくらいだった。その大白鳥が組織に入ってまで欲しい情報が何か宏夢は悟ってしまい、笑っているのだ。

「……………　大白鳥だった私は死んだよ。めった刺しにされてね」

隆起した山のように高かったプライドも陥没により、地獄に近い低さに成り果てた。幸綱はそれでも良いと思っている。低いならまた高く積み上げればいい。プライドなんていくらでも隆起させられるのだから。

幸綱の考えが百八十度方向転換したのはやはり拘留中にある。自分がした行いが否定され、生きる自由を奪われ、一時は死への恐怖をもこの身を持って体験した。

「だから、津浪が生きていたとしても私は私のままだ。今の藤本幸綱であることに変わりはない」

「……………」

幸綱の真摯な黒の眼差しに惘と宏夢は固まった。

唯一変わったのは嫌悪感だけ。自分のした行いを真つ正面から直視せず、逃げる奴に強烈な嫌悪感を抱くようになった。

生きてたくても生きられない人を見たのも一存に含んでいる。

「私はお前達を捕獲する。それで生きてくれないと思えるほどの地獄を味わった後、バラバラにしてあげるよ……………」

ニコツと笑った後の幸綱の行動は目を見張るものだった。身体を折り、後ろから羽交い締めにしていた惘の身体ごと投げ飛ばす。一本背負いの身体バージョンだ。

前には宏夢がいたが、気付いて横に避けていた。幸綱は反動を生かし、空中に飛び上段蹴りを喰らわす。ミシリと左二の腕の軋む音が響く。途端、苦痛に歪む宏夢の顔が広がった。骨に異常はないものの、痛みで痺れ動かすまでに多少時間が掛かる。

だが腕一本使えなくなっただけで動けなければ死と隣り合わせの世界では生きていけない。こんな痛みには十二分慣れているはずだ。並大抵の精神力と根性を併せ持っているのは予測出来る。

幸綱は地面に転がさられていた愛刀を手に取り、鞘から引き抜いた。鞘は左手に刀は右手に持つ。

宏夢は左手でなく、右手に持っていた幸綱の銃を向ける。銃口は幸綱の眉間に向かっていった。

幸綱と宏夢の距離は一メートルもない。愛刀を鞘から引き抜いており、切っ先は宏夢の頸動脈に宛てている。

お互い、一步も譲らず。身長のリーチの差が二人にあるものの、腕のリーチに差はほとんどない。身長は不利でも間合いを詰めている幸綱が有利だ。

「刀で反応する場合と銃で反応する場合。……………どちらが速いんだろうな？ 友紀ちゃん」

ニヤリと嘲笑う宏夢。

確かに反応速度、反射スピード、距離間を考えても圧倒的に宏夢の方が有利だ。宏夢を確実に仕留めるには何か別の方法で仕留めなくてはならないだろう。

「その名を口にするな、反吐が出るし何度も言わせるな。……………速さは一切合切関係ない。私はお前らを拘束する。それ以外にすることはない」

きつぱりと幸綱は断言し、一步前に出る。仕留めていた頸動脈を切り、右腕が犠牲になったがさほど気にすることなく手首に隠しておいたクナイで宏夢の喉元を掻っ切った。ぼたぼたと夥しい血液が切り口から流れ出る。

「……………いつてえ、容赦ないね。友紀ちゃんは」

喉元を押さえてばやく宏夢。ぼやいている間に幸綱は膝蹴りを腹に食い込ませ、地面に沈めさせていた。両腕を背中で組ませて、持っていた手錠をかける。鎖式の手錠ではな電子式の手錠。そう簡単に外れることはない代物だ。

一瞬の隙をも逃がさない。幸綱のモットーでもある。

「容赦ない？ 何度も言っただはずだ。今殺されないだけありがたいと思え」

「俺は今死んだっていいんだけどねー。友紀ちゃんには困るんじゃないかな？」

じわりと血が広がっていくが、致死量ではない。油断を作らせるために搔っ切ったよなものだから傷口は浅い。

宏夢の言葉に幸綱は顔を顰めた。

宏夢は何を知っているのだろうか。幸綱が知りたい情報であるのは確かだろうが、そう簡単に口を割るとは思いがたい。

苛立ちから幸綱は爪で喉元の傷口を刳った。汚い血が爪の間や指に付着するが気に留めている場合じゃない。

好条件を逃してしまえば聞けなくなってしまう情報だって含まれているはずだから。

「ぐ……」

わずかに呻く宏夢。脂汗も額から流れ落ちていた。出血が多ければ死に至る可能性だって少なくはない。

ただ今は入る情報さえあれば、この男の命など無下に扱っても構わないとさえ思えてきた。

「言え、はぐらかすなんて馬鹿な行為したら許さない……！」  
「……………」

静かに怒りを響かせる幸綱。ギラリと底冷えする瞳を湛え、幸綱は圧力を掛ける。怒りを携えているものの、顔に表情は一切浮かんでいなかった。

案の定話そうとせず、笑みを湛える宏夢を見て、幸綱の怒りは沸点を振り切ろうとしていた。

指により強い力を掛け絞め殺そうとした時、ばたばたと正面ゲートから走ってくる男達が視界に割り込む。銃とアクリル盾を構えて隊列を構成して近寄り、ぐるりと四方を囲むように包囲する。

「幸綱！ 何をしているんだ?! 大事な証人を殺す気か！」

アクリル盾を構えている男達の中から一人の男が割り込んできた。その後ろからゆいちも駆けつけてくる。

幸綱の知る人物だ。名前　コードネームは玖珂。組織の規定で本名は出さないようになってる。幸綱は特別扱いのため、本名だが他の構成員は全員コードネームを使用していた。

幸綱は玖珂の姿を確認し、舌打ちしてから食い込んでいた指を離した。

醜い黒血色の液体が指に絡み付いていたので、視界に入った宏夢の服で拭き取る。後で石鹼とエタノール消毒をして、綺麗に洗い流そうと思っただのは言うまでもない。未だ宏夢の背中には乗り上げたままだった。

玖珂というのは幸綱が所属している組織の上司に当たる男であり、幸綱を番犬にしようと決定したのも玖珂である。痩せ型の体躯に黒の闇に溶け込みそうな上下のスーツに白のワイシャツ、ノーネクタイ、貼り付けたような甘いマスクの笑顔。

一見優男に見えるのだが、本性は優男の微塵の欠片もない。冷酷非道、極悪、邪道という言葉が並ぶくらいに卑劣な性格の持ち主だ。逆らうものならば、死を覚悟して臨まなければならないほどに。

「で、幸綱。この男達は？」

「宏夢に悼！？　何でだよ、この前処刑したはずじゃなか！」

玖珂が倒れている宏夢、悼の二人を見て状況説明を促してくる。

ゆいちは幸綱の周りにいる黒田宏夢と悼の姿を見て、吃驚した。まさか生きているとは思ってもいなかったのだらう。だけど、ここにいることが何よりも証明してしまっている。

幸綱は溜息を一つ零した後、淡々と答えた。

「自爆テロ実行犯と言いたるところだが、その仲間らしい。そこに

転がっているのが、この前逃がした黒田惇。私の下にしているのが本物の黒田宏夢。先日処刑したのは陰武者だったようだ」

結構な血液が流れ出たから、宏夢は起き上がることも出来ない。そもそも幸綱により手錠が足首にも掛けられているので、逃げることはまず不可能に近かった。

「ああ、例の。へえ、本物はちゃんと藍色の瞳を持っているんだねえ。幸綱の心は楽しかったか？」

玖珂はしゃがんで、宏夢の前髪を引つ掴んで上を向かせる。無邪気に笑みを浮かべるが至極慚愧なことを考えているに違いない。

好きな玩具を手に入れて、楽しそうにする子どももの瞳だ。子どもといっても玩具を破壊するような残虐性の高い子どもだが。既に生氣は宿っていない苦痛で歪む瞳で玖珂を見る宏夢。

「藍色の瞳？」

玖珂の言葉にふと疑問に思っ幸綱は癖となりつつある眉間に皺を寄せて尋ねた。藍色の瞳と自分自身の心がどう関係するのか気になったのだ。

だけど幸綱は思い出した。先日処刑した宏夢の影武者の瞳の光彩は人工物。つまりカラコンで瞳の色を変えており、自然体での目力を感じられなかった。今の宏夢の瞳は人工物でもなく、ちゃんとした本物の瞳の色だ。

だが玖珂はその他に何かしらあるような口ぶりをしている。

「幸綱、知らない？ 藍色の瞳は悟りを持っている人なんだ。すごく判別のしやすい特徴だ。悟りとは相手の心の声を無断で読み取ってしまう人のこと。相手に触れることなく、勝手に悟り人の脳内

へ垂れ流し状態。でも幸綱みたいに読めない人もいるからなあ」  
「……………」

小馬鹿にされたように言われたので、幸綱はムツとした。眉間の皺を取ろうと玖珂は宏夢の前髪を掴んでいる手と逆の指で幸綱の眉間を揉んできた。幸綱は手を叩き落とした。汚いものを触れたかのように邪険に掃い落とした。

初めて聞いたことだし、無断で読まれていたことに幸綱は腹が立ち、膝で抑えて付けていたのを強くした。背骨圧迫により肋骨、肩甲骨、胸骨、肺に幸綱の体重と重力が掛かり苦しげに呻く。

このまま肋骨を圧迫骨折にして肺を突き刺してやり苦しみながら殺してやるうかと殺意が沸く。殺意が沸いても実行出来ないのが今の幸綱の束縛。

「幸綱、それぐらいにしておこうか」

玖珂からストップの声がかかったので、幸綱はようやく宏夢の背中から退いた。逃げても困るので首に手刀を打ち込み、気絶させてからだが。

「幸綱、制圧には感謝するよ。でも加減を知ってくれないかな？」

津浪君の情報は組織で全力で調査しているんだ。勝手な行動は困る」「勝手な行動？ 私は忠実に動いているじゃないか。欲しがっていたモノが目の前にあつて、欲しがらないフリをしていると言っのか」

地面に放り出されたままの銃二丁をホルスターに、愛刀をウエストポーチに入れていたタオルで刀身の血を拭い去ってから鞘へしまい込む。鞘に収まった愛刀を腰に戻す。ようやく相棒が戻ってきたようで安心感が沸き、ほっと一息吐いた。

例え普通の飼犬だとしても散歩中に興味があれば寄って行くだ

ろっし、欲しいモノは飼い主にねだるだろう。幸綱は欲望に忠実になっただけだ。

「とんだ犬を持ったもんだ！ 強硬な鎖と首輪を幸綱に着けなきゃいけないかな」

笑い飛ばす玖珂。気絶させた宏夢と転がっている惇兄弟は玖珂の部下によって運び出されているところだった。

鎖の手錠ではなくて電子手錠だった辺り、組織は逃がす気はないらしい。簡単に脱走出来るならば、既に幸綱も脱走している。

「首輪か。そうだな、着けないといけなくなるかもな。いつ抜け出してもおかしくない」

首輪は既に着けている。持っているだけだが、着けているのと同じだ。

「逃げ出さないように見張っていればいい。そこにいる優秀な部下を使ってな」

幸綱は外を出た時から気付いていた。一人になりたくても、玖珂の部下が見張り、一人になれない。なれた気分になれないのだ。

だから幸綱はなるべく、見張りを退かしてから一人になろうとしていた。野良だった時よりも束縛が強いものの、ちゃんと確かな情報が入ってくるので目をつぶっている。

欲しいモノは我慢するというのが幸綱の心情でもあるが。

「幸綱、どこから手に入れたのか分からないけど、そんな銃を持つて歩いていたら危険だよ？ どこから持ち出したのかなんて、調べればすぐに分かるけどね」

「……………」

すいつと指差した方向に目をやれば、両腰のホルスターに下げられたデザートイーグルが収まっていた。細く華奢な幸綱の体軀には不釣り合いな銃が右腰と背中の中のポーチに二丁。更に左腰からは愛刀も下げられている。

玖珂には幸綱が扱えないと思っていたのだろう。先日片手で撃つたことはゆいちちによって報告済み。射撃場での『アソビ』も監視している部下によって報告はされているはずだ。

確かに今の幸綱は右腕を負傷しており、万全の態勢ではないし、銃の腕前を披露したこともない。今更、腕を披露したところで状況が変わるわけでもないから。

「幸綱、俺は期待しているんだよ。その常人離れている君の能力に……………。組織にいる奴らは情に揺れやすいが幸綱は違う」

この男は何が言いたいのか、幸綱には分かりかねていた。ただこれからも犬として、こき使われるのだなと察しただけに留まる。

これ以上踏み込むのは危険と、本能が警鐘を激しく打ち鳴らしたからだ。

「ま、回転式だと不満だったろうからそれは支給することにするよ。その銃は幸綱の好きにすればいい。　　けどな、幸綱。これだけは言っておく」

「……………なんだ」

「幸綱の敵は案外、近くにいるかもしれないね」

「玖珂さん、一体何を言い出すんですか」

「ゆいちは黙っていなさい」

ぴしゃりと言葉を出すのを遮られる。ぐっと真一文字に口を結ん

で、俯くゆいち。

無風なのに風は吹くはずなのに幸綱のポニーテールの髪がふわりと横に流れた。乱れた横髪が顔にかかる。払い除けずに髪の毛の隙間から玖珂の顔を窺った。すると玖珂の作られた笑みが自棄に気持ち悪く見えた。

この男は一体何を言い出すのか、幸綱には理解不能だった。

「何が言いたい」

目を瞪るとか、吃驚した表情を心だけに押し留め、幸綱は冷静に訊ねた。

じろりと上司に当たる玖珂を睨み付けるが、殺気立っている睨みなど威ともせず玖珂は口元に笑みを浮かべただけで流した。

まるでなかったかのように笑み一つで、受け流したのだった。一切耳を傾けなかったと言っても過言ではない。

「幸綱、人間知らなくても良い時と悪い時があるんだよ」

玖珂はふんわりと柔らかな笑みを一つ浮かべながら、幸綱の唇に人差し指を当て、親指を添えると口チャックをするように横へ引いた。だが幸綱はそう簡単に引き下がるような奴ではない。

「今は知らなくて良い時だと言いたいのか。私がそれで納得し、引き下がる奴だと思っているのか」

眉根を寄せて幸綱は言い放った。寄せられた眉を見て、玖珂は苦笑いを浮かべる。幸綱はこういう性分なのだと思っているのかもしれない。

「そんな簡単に納得してもらおうとは思わないよ。ただね、これ以

上踏み込んでしまえば、幸綱の身も安全にはならないと言いたいだけだ」

「危険だと言ってしまったっているじゃないか」

はあつと溜息を吐けば、玖珂は眉尻をへの字に下げた。

何を幸綱に待ち受けているのが理解しがたい。玖珂は言葉を濁すだけで、その先について口を割ろうとしなかった。

「で、とりあえず幸綱。勝手な行動をした罰をちゃんと受けてもらおうか」

「幸綱！ 危ないっ！」

身体を横に押される。幸綱と玖珂の間に割り込んでくる。幸綱の視界いつぱいに広がる、ゆいちの黒い背中。

ずぶりと鈍い何かが、貫通した音が聞こえる。ガハリとゆいちが口から黒赤色の血を吐き出す。飛び散った血が幸綱の顔にも付着する。幸綱に寄りかかるように倒れかかるゆいち。支えた手のひらをふと挙げてみると、真っ赤に染まった自分の手。

ゆいちを見ると腹から背にかけて刃物が突き出ていた。柄を離し、三日月に口角を上げる玖珂。

「ゆいち！ ゆいちっ！」

「ゆき…っ…な、逃げる……！」

「あれ、深く刺したつもりなのに凶太いね。さすがだよ」

「玖珂…なんで……」

こつりこつりと革靴がコンクリートにぶつかる。

「玖珂！？ 貴様なんで！？ 何で、刺す必要があるんだ!？」

「ああ、友紀じゃなかったんだ。ゆいちも友紀も僕の言うことをち

やんと聞かないんだから。お仕置きをしたまてだよ。お仕置きには痛みも必要だろう?」

地面に顔を伏せて、息絶え絶えにいるゆいちを見て、ふと笑う玖珂。

「仕置きだと、ふざけるな！人を刺してまで、黙らせる必要はどこにもないっ」

「僕にはあるよ。特に友紀は僕の言うことを聞いてくれないと困るんだよ」

眉尻を下げる玖珂。玖珂の命令云々よりも幸綱は憤怒していた。

「その名前で呼ぶな！」

名前だ。一度捨てた名前を、たとえ上司である玖珂だとしても、誰も連呼される謂れはない。

「どうして？僕が呼んではいけない権利がどこにあるんだい？」

「その名前の奴はもう存在しない」

きつぱりと言い放つ幸綱。

「友紀が津浪を殺したから？」

「……………」

「でも友紀。思い出してごらん。津浪はドラゴリーネであるはずなのに塵とならなかった。津浪はある目的を果たすために一度死んでおく必要があったんだ」

「どづいうことだ」

いくら身体を強化できるドラゴリーネであっても、致命傷となる傷は命に関わる傷となる。とっさに防御態勢が取れていなかった津浪もまた然り、心臓を抉られていたはずだ。

ドラゴリーネでも心臓を奪われてしまったなら、再生することは出来ない。発展に発展を重ねた再生医療でも心臓を作ることはタブー視され、心臓は再建しない決まりとなっているのだ。

「ドラゴリーネは進化をしている。それは友紀も十分承知のはずだよね？」

「何が言いたい」

「つまり津浪はあそこで一旦死んだ。だが身体を別のドラゴリーネに移す能力を身に付けた……今は玖珂、と名乗っている人物にね」

「……まさか」

「その通りだよ、友紀。僕が津浪であり、玖珂だ。気付くのが遅いんじゃないかな？ ずっと隣にいたのに僕の進化に気付かないんだから」

酷いよねとくすくす嗤う玖珂が信じられなかった。目の前にいる上司が死んだはずの津浪だと言う。誤りだと叫びたかった。

「嘘だ！ 津浪はあの時死んだはずだ！ 死んだ奴が生き返るはずがないっ！」

「ここにいる僕自身が証拠だよ。ねえ、友紀もう一度、僕の傍にいてくれないかな？ 友紀を愛しているんだ」

コツリと革靴を鳴らして、玖珂が近寄ってくる。幸綱はゆいちを抱き締めたまま、後ずさった。ピクリと玖珂の いや、津浪の左頬が揺れ動く。

「お前は狂っている！！ 何でまたそんな執着しようとするんだ！

「？」  
「友紀を愛しているから。僕には友紀以外いらぬ。友紀が僕の傍にいてくれればいいんだ。僕と友紀の邪魔をするものは排除するのみ」

「……………！」

一生離さないという玖珂を恐れる幸綱。  
幸綱は恐怖を抱いて、玖珂に刀を向けた。

「玖珂、貴様…っ！！」

「玖珂じゃなくて、津浪。だよ、友紀」

ニコリと嗤い、玖珂は幸綱の頬に触れてくる。幸綱はバシリと玖珂の手のひらを叩き落して、二三步後ろに下がった。

「津浪はもういない！！ 死んだ奴が容易く甦るもんか！」

幸綱の怒号が飛ぶ。

「じゃあ、もう一回僕のことを刺してみる？」

「……………っ！？」

「友紀のその刀で、もう一度」

何の自信があつて、玖珂が言うのか幸綱には理解が出来なかつた。

「優しい友紀には出来ないよ」

ぶすりと刺さる。玖珂が最後まで言う前に幸綱は玖珂の心臓目掛けて、持っていた愛刀ではなくて、懐刀を刺していた。じわりと滲む黒い血。ドラゴリーネでも赤いはずの血は黒くなつていた。

玖珂の口元からも黒い血が流れ出ていた。  
墮ちたドラゴリーネの血は黒くなると聞いたことが幸綱にはあつた。

「……………いつまでも優しいと思うな。お前に最終審判を下す。統べてのドラゴリーネに対する冒瀆だ。だから今、滅してしまえ」

幸綱の声に同調するように懐刀も輝き出す。閃光に包まれる玖珂。火が灯り、玖珂の身体が燃やされていく。

アスファルトの焦げる臭いが周辺に充満する。

「熱いなあ、ホントに。友紀、僕はいくらでも甦るよ。そ

して、友紀を飼ってあげる」

「逝けよ。お前は甦らなくていい」

最期くらいはと、口端を上げて送ってやる。

無邪気な笑顔を向けられていた津浪の面影はまるでない。残虐性に帯びた笑顔が目の前にあるだけだ。

見ているだけで、吐き気を催してくる。

目を閉じ、幸綱は刺していた懐刀を玖珂の身体から引き抜く。閃光はより一層輝きを増し、目を閉じていても分かるくらいだった。

ゆっくり、時間をかけるように目を開けると、幸綱は涙を流していた。

我慢していた涙腺が、玖珂の消滅とともに決壊する。はらりはらりと涙が落ちてくる。

「ゆき……………つ、な。どうした……………?」

げぼりと空気を吐き出し、ゆいちが幸綱を見上げてくる。顔面蒼

白だ。

「あんな愛され方は、されたくない……………」

無邪気な笑顔の津浪が好きだった。

いつも傍にいて、励ましてくれる津浪が好きだった。  
幸綱が思っていた津浪は、もういない。

「幸綱は、俺が愛すよ。……………すげえ頼りないけど」  
「え？」

ぼかんとした表情を向ける幸綱。

「幸綱、首輪付けとかなないといけないから。誰かがいないと一人で突っ走るから。俺が傍にいてやるよ」

「……………ありがとう、ゆいち」

そっぽを向いて、言うゆいちの顔は赤かった。

「髪を切ってくれないか？」

そよそよと流れる川岸に幸綱は来ていた。白の小袖と紺の袴姿には変わりはない。定位置の腰に愛刀を携え、幸綱は持っていた懐刀をゆいちに差し出して頼んだ。

「どういう心境の変化だ？ あれほどまでに髪の毛を切ることを嫌がっていたはずだ」

「長い髪であることにもう未練はないし、必要性が見出せない」

「お前は納得しているのか？」

「納得していなければ髪を切れなど頼まない」

芝生に座り込み、幸綱は腕を組んで目を閉じる。

「そうか」

幸綱から懐刀を受け取り、幸綱の背後に回って、結ばれていない髪に手をかけた。痛みのない黒髪。切ってしまうのは幾分勿体ない気がしたが、幸綱の頼みだと思い、ゆいちは意気込んで、髪を一束掴むと削ぎ落とした。

じよきり、じよきりと切り、地面に落ちていく髪の毛。地面に黒い塊が出来るのかと思いきや、地面に落ちた途端、塵へと化して消

滅する髪の毛。

「……………髪の毛もまた、消えていくんだな」

「ああ、人間も死んだら埋葬される。生きている生物全て最後は地面に還るんだ。還らないモノがあつてはならないから」

短く切った髪の毛。

津浪のためだけに、津浪を思つて伸ばし続けていたけれど。もう必要がないから。

過去に囚われたまま、生きるのは自分じゃないから。

何かに囚われているのは自分じゃないから。

だから、ここでもう別れを告げる。

「んじゃ、ありがとな」

風が靡く。

幸綱はすくつと立ちあがる。待てよとゆいちの制止がかかるが、幸綱はくるりと振り返つてお礼を言った。見せることのなかった満悦の笑顔で。

了

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5701s/>

---

doomsday

2011年4月24日08時42分発行